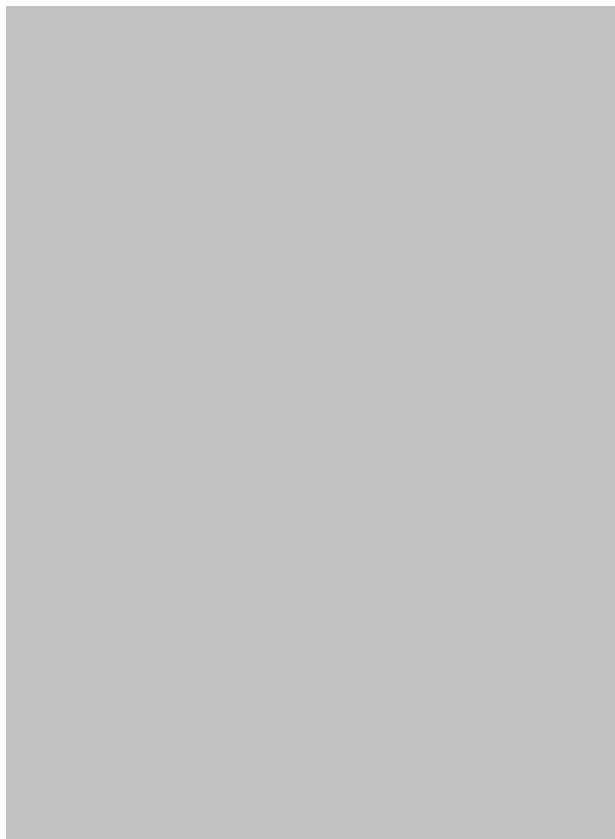


ジョアン・ミロ

《絵画詩(おお!あの人やっちゃったのね)》



ジョアン・ミロ (1893-1983)
《絵画詩
(おお!あの人やっちゃったのね)》

1925年
油彩・キャンパス 130.0×95.0cm
平成24年度購入
(盛田良子コレクション)

©Successió Miró-Adagp,
Paris & JASPAR, Tokyo, 2013
E0523

今

号から、新しくコレクションに加入した作品を一点ずつご紹介するページがスタートします。美術部門の第一回は、バルセロナ出身の画家、ジョアン・ミロです。微生物のようなかたちが楽しげに浮遊するタイプの作品がよく知られます。しかし、この作品は何か地味で取り付きにくい感じですか。実は「微生物」タイプに移行する前、ミロはこうした謎めいた作品を描いていたのです。

では作品を観察してみましょう。画面には青い絵具が飛び散り、そこに踊るような黒い線がまつわりついています。線の一部はよく見ると文字になっていて、フランス語で「oh! un de ces messieurs qui a fait tout ça (おお!あの人やっちゃったのね)」と書かれて(描かれて?)います。一体何を「やっちゃった」というのでしょうか? 縦に長く引かれたS字型の線は、ふたりの裸の女性の身体のように見えます。するとこの作品は、ある男性(En de ces messieurs = 直訳すると「複数の紳士の中のひとり」)が、何かエロティックなことを「やっちゃった」と語っているのでしょうか。

ちなみにミロ自身は後年この作品の主題を、なんと「おなら」だと述べています(Rosalind Krauss, "Michel, Batallie et moi," *October*, Vol.68 [spring 1994], p.7)。すると、左の女性の身体は、実は大きく開いた脚を下から見たところで、丸い肛門か

ら青い絵具のおならが勢いよく飛び出しているのでしょうか。つられてフランス語の文字も、「書かれた」言葉としての意味を失い、噴出したおならの一部を「描いた」もののように見えてきます。どんな意味にでも読みとれるあいまいな文章。文章の読み取り方に引っ張られていろいろなものに見える青い絵具と黒い線描。文字は「言葉」になったり「絵」になったりと、めまぐるしく変化し、下塗りを施していない麻布の地は、身体やおならの「絵」が漂う無限の空間にも、「言葉」が書きつけられる物質としての面(ちょうどノートの紙面のような)にも見えてきます。

ところで、勢いにまかせて一気に制作されたか見えるこの作品ですが、近年下絵が発見されました。この作品は、長く信じられてきた「子どもみたいに無邪気で汚れない」ミロのイメージを、入念な下絵の存在や「下品」な主題によってひっくり返すきっかけとなった、重要なシリーズに属しています。それだけにこの作品、まだまだたくさんの謎を秘めています。

なお、この作品は個人コレクター、盛田良子氏が長く所蔵されていたもので、八月四日まで「MOMATコレクション」展内「特集：盛田良子コレクション」に展示されています。このチャンスに、あなたもぜひ実物の前でミロの謎に挑んでみて下さい。

(美術課長 蔵屋美香)